

と胸が熱くなり、顔がほてってくるような」と千代さんのありし日をしのんでいます。その千代さんの喪にふくし、喪を語ったこの書物は、千代さんとともに行動した第一高女生、また、傷病兵とその看護の女子生徒をけなげに指揮しつづける千代さんを「悲母観音」と讃えた三村上等兵、その彼をシテ役にして沖繩戦の最後を精緻に描き、焦熱地獄のなかでもがき苦しみ死んでいった第三外科壕「ひめゆり部隊」の乙女たちの鎮魂を歌いあげています。

辻さんは、第2回目の沖繩訪問記を桜蔭会報によせら

れています。にもかかわらず、私がここであらためて親泊千代さんについて記すのは、私たちの先輩に第二次大戦の捨て石になられた方がいらしたと、そして、戦後40年、いまや防衛費のG.N.P.比1%枠問題がゆれるなかで、沖繩戦が風化しようとするとき、ひめゆりの塔から親泊千代さんは、なにを叫び、なにをさし示しているのか、あらためて自分自身に問いかけ、考えなおさなければならぬからにはほかなりません。

(都留文科大学)

## セイシユルのマーケットで

岡田 久美子

先年、東アフリカへの途次、たった一日だけ立ち寄ったセイシユルの印象が未だに鮮かなので、そのことを少し述べてみたい。

資料には「地上最後の楽園」云々と、うたわれているセイシユルの島々。過度の期待は自ら失望を招くもと、との危惧はあっても、未知の土地への憧れは次第に膨らみ、BAヨハネスバーグ行きにいそそと乗り込む。

夜景きらめくホンコンと、蘭の花々に溢れたコロンボを経由した機は、照明の乏しい、至ってお粗末な空港に着陸。そこで期待の第一歩を出迎えたのは、何と迷彩服に小銃の兵士の姿であった(この少し後にクーデター未遂騒ぎ)。

暑い。それもひどく、尤もここは南緯4度の小さな島、蒸し暑いのは当然としても、今は真夜中。教室で「熱帯では年較差は小さいが日較差なむしろ大きく、日中に比べて夜は涼しくなる」などとしゃべっていたことがそら恐ろしい。

ゆっくりと廻る天井吊の扇風機の下で、ゆっくりとした空港作業員の仕事をただひたすらに待つ、佻しく暑い「楽園」の夜であった。

ところが翌朝、外が明るくなって眼覚めると、滲としたインド洋が眼下に拡がり、リーフ特有の透明なエメラルドグリーンがキラキラと踊っている。椰子の葉越しにこぼれる朝日は、繊細な黄金の縞模様を描き、水平線の真白な雲は、碧い空をますます碧いものにしていく。

そしてこの広い広い浜辺に、人影が無い——。椰子の木と木の間に吊ったハンモックに揺られ、潮の香と鳥の声の中でブーゲンビリヤの花を愛でれば、昨夜のことどもは雲散霧消、今はまさに「楽園」に遊ぶ心地である。

清澄な空気は健康な食欲を誘うが、それを充たしてくれるのは、地元クレオール料理。これは素材、味つけ共に日本人の舌に快よい。魚介類と果物の豊富な食卓に満足し、主婦本能に基いて、主都ビクトリア最大のマーケットを覗いてみる。魚の売場には、驚いたことに氷もなければ冷蔵庫もない。早朝水揚げした魚は午前中に売り捌いてしまう由で、逆にいえばそれくらいしか獲ってこないのだ。しかし独特の、かなりの臭気が鼻をつく。大きな太刀魚に似た魚が、筒切りにされて紐を通して吊下げである。小鯛のような魚は、数匹まとめて葉つきの小枝に通し、これもそのままぶら下げて帰れるようになっている。

日用雑貨の売場に行ってみると、日本ならどんな少額の買物でも無雑作に入れてくれるビニールの白い袋、あれがここでは立派な売物に。すり鉢は?とキョロキョロしていたら、店番が愛想よく英語で話しかけてきた。日本人と分ると、彼の持ち合わせている日本の知識の全てを披露してくれた。曰く、「ホンダ、ソニー、ヒロシマ」考えてみると、この取り合わせ、中々どうして意味深いものがある。

セイシユルには、花崗岩の山々と珊瑚礁が織りなす変化する地形、Af気候に育てられた巨大なココデメールや象亀、複雑な植民地支配の名残りから、ゲルマン系とラテン系の交錯する風俗等々見るべきものが多い。しかし私は、先の言葉を現住民から直接聞いたことだけでも、この島を訪ねた意味があったように思う。

地理学の徒は、他のことは儉約しても旅費に貯えを投じたい。この当然のことを、いま改めてこのマーケットの強烈な匂いの中で認識したのであった。

実際に見て、聞いて、触れて感じたことは強い。これに一寸した失敗談のおまけでもつけば、生徒達の瞳の輝きは更に増幅して行く。

今は、あのマーケットの勾いまでもが不思議に懐しい。  
(3回生)

## 四 半 世 紀

阪 尾 スミ子

去年の今ごろは、はじけんばかりの中生たちのエネルギーを、はっと受け止めて(?)講師生活の日々でした。それはずしりと手応えのある充実感に満ちたものでした。そして現在対照的とはいえ、結構忙しい主婦の座にもどっています。

さて、あっという間に五十歳の大台に乗ってしまった今、来し方を振り返ってみると——。最初の四半世紀一娘時代—の何と単調だったことでしょう。まっしぐらに、いわば自分の思いのままに進むことのできた時期、努力さえすれば道は拓けると信じられたのでした。家庭とは私を伸び伸び成長させてくれる大切な母胎で、自分が主役ではありませんから特に束縛を感じることもなく過しました。ところが第二の四半世紀の何と多面的なこと!! 外で仕事を持ちながら家庭では、妻、嫁、主婦、母などに变身しながらの役割があり、一日が三十時間あったらなあと思ひながら暮したものでした。教職という仕事は日々新たなりで頭脳も、それ以上に肉体もフル回転を強いられます。社会科ではどどんと学んでいかないと自分が涸渇してしまいます。また生徒との対応も千差万別で、これは経験を積み重ねて次第に力になっていくものでしょう。私が専任をやめたのは、勤めて十二年、まあ軌道に乗っていた時期です。けれども、病身の姑の調子が良くないこと、二番目の子を頼んでいた母も体力的に大変になってきたこと——つまり家庭では私を最も必要としており、その中で責任ある仕事と両立していけるかに直面しての選択だったわけです。悔いは全くありませんでした。ある時発熱した下の子をおんぶして寒空のもとお医者様へ急ぎながら、幸せだなあと思ったことを今でもはっきり覚えています。というのは上の子の場合0歳から入学まで保育所でお世話になり本当にありがたかったのですが、病氣の時は大変でした。「お迎えに来てください」と職場へ電話が入りますと、すぐ授業のお手当てをしなければなりません。四方八方への気配り—それを

思い出すと何と幸せかという思いになるのでした。家事の明け暮れは同じことのくり返し、誰に評価されるわけでもなしと考えれば張り合いもないでしょう。でも私はけっこう創造的な仕事と思いましたし、自分がかねめにいればこそ家庭は滑らかに動き、家族の力も生き、安堵も得られるかけがえなく大切な役割と思っていました。確かに自分はどこへ行ってしまったんだろうと自問自答したこともありますが、人はその立場でそれぞれ長所を生かし合って生きていくものだと思います。また地域社会などで、全然ちがう世界、生き方をしている友人たちに恵まれたのも、すばらしい財産です。今、主婦が働いたり学んだり楽しんだりする場面はたくさんあって、それを選ぶ自由を持っているのは本当に幸せだと思うのです。

こんな生活を八年ほどしてから、また元の職場に呼ばれ、講師生活がはじまりました。姑はすでに亡く、子どもたちも成長して勤めの支障はありません。すっかりさまがわりした中学校では、体を張っての授業(?)ではあっても苦も染もありです。教材の準備などよい頭の刺激となり、適度の緊張感も快いものでした。

昨春この生活を変えたのは、一人暮らしの母の健康です。育児については保育所などがありますが、老親をどうみるか、やっぱり家族にゆだねられているのが現状ですし、まして子どもが世話になった母のことです。そしてこれが本音かも——次のつまり第三の四半世紀こそ、主体的に道を拓いていきたいという願いです。主婦の自由さから、お茶大で用意してくださった市川巡検に参加して、その楽しかったこと!!前年の三浦半島の時も同じでした。第一線でご活躍の先生方と学生時代にかえってご一緒できるとは!! 中味の濃い第三の四半世紀(第二の青春でもあります)を旨ざして、胸のふくらむこのごろです。

(5回生)